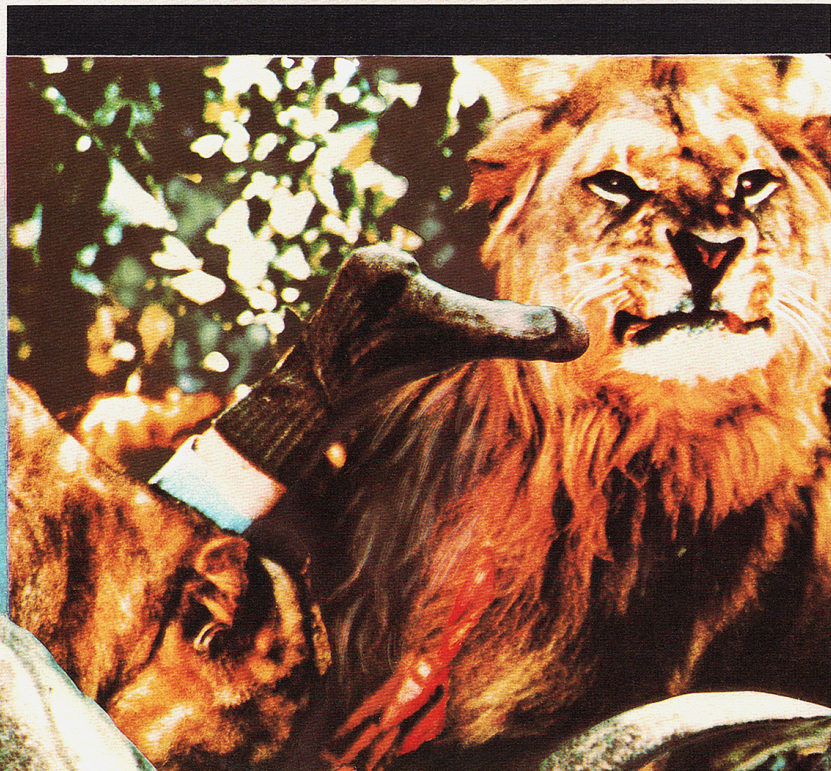




ライオンが人間を喰い
人間が人間を狩る！
あまりの衝撃に
世界中が身震いした
恐るべきドキュメント！



20世紀文明の切り口からしたたり落ちる
残酷の血、そして恐怖の脂汗
アルベルト・モラビアは叫ぶ
人類に未来はあるのかと……

監督・撮影／アントニオ・クリマーティ
マリオ・モッラ
ナレーション／台本／アルベルト・モラビア
サントラ盤／オデオン・レコード

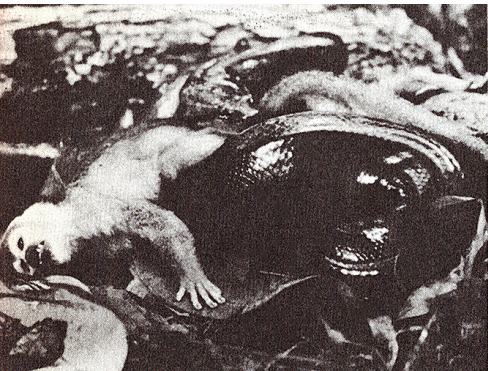
グレート バンダガ

地上最後の残酷

長篇ドキュメント
日本語解説版
ULTIME SAIDA DALLA SAVANA
〈カラー作品〉

イタリア映画
日本ヘラルド映画





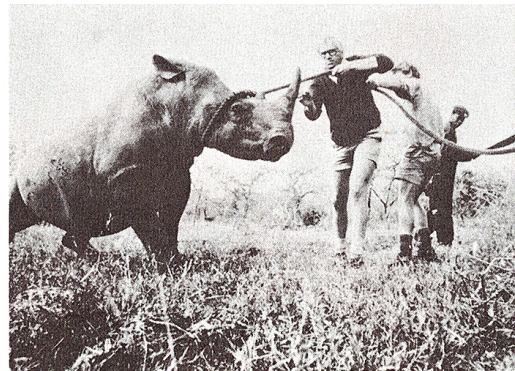
地上最後の残酷<カラー作品>長篇ドキュメント

グレートハンディグ

日本ヘラルド映画

ULTIME GRIDA DALLA SAVANA

イタリア映画



■「スーパー・ヤコペッティ映画」の登場
恐るべき映画が現われた。「グレート・ハン
ディング」という題名の通り、この衝撃的な
長篇ドキュメントのテーマは、動物対動物、
動物対人間、そして人間対人間の間に、いま
もくりかえされる「狩り」の生々しい実態で
ある。生存を賭けた喰うか喰われるかの死闘
もあれば、残酷な楽しみのための虐殺も描か
れる。

二人の若いドキュメンタリー作家アントニ
オ・クリマーティとマリオ・モッラは、アフ
リカ、アジア、ヨーロッパ、南北アメリカ、
オセアニア、南極、北極地帯にいたる全世界
を四年間にわたって長期ロケ、二〇万メート
ル（延百二十時間分）のフィルムを廻わして、
この超大作を完成させた。彼等の姿勢は、極
力「演出」や、興味本位の「事実再現」をさ
け、**事実の持つ衝撃で勝負している**。この点
で「残酷ドキュメント」の元祖ヤコペッティや
その亜流と明確な一線を画している。何故、動物
と人間の間の共存と調和が不可能なのか、と
ヒューマンなアピールを一貫させているナレ
ーション台本は、**アルベルト・モラビア**。い
うまでもなく、「無関心な人々」、「軽蔑」など
の作品で知られるイタリアで最も高名な文学
者で、映画に対する深い関心を持つことでも
著名。

鮮烈なメッセージと「本物」の迫力、そし
て画面の持つたぐい稀な美しさは、文句なし
に「ヤコペッティ」を越えるものとして、こ
の作品は今、イタリアで異常ともいえるセン
セーショナルなヒットを続けており、「ゴッド
ファーザー・パートII」の約二倍の興行収入
を記録している。**上映時間 一時間三六分**

■生存の死闘——そしてニアミ族の人肉 喰い

生きるために他の動物を倒して喰う。密林
の掟であり、自然の残酷なルールである。オ
ランウータンを襲う豹。小猿を毎日数匹も吞
みこむ六メートルのアマゾン大蛇。そして、
狩りをして獲物を得るしか生きることの出来
ない未開の原住民もその掟なかにいる。槍や
ブーメランでコウモリを落すオーストラリア
の原住民。こうした原住民の狩に対する信仰
は、文明人の想像を越える。一九七五年一月
二十五日、中央アフリカのブルンジでニアミ
族の兄弟が、自然死した父親と親戚の死体の
頭をオノで叩き割り、その脳をすり、肉を
喰うという事件があった。これは、ニアミ族
にあつては珍らしいことではなく、彼等の習
慣として死人から狩りの知識や技術を受けつ

ぐための儀式であり、国家の禁止令（死刑）
があつても決して絶滅することがない。

■大地と交わる原住民と文明の暴力

狩猟民族にとって、大地は神聖である。ク
ルー族の男たちは、毎年シーズンの初めに
大地に穴をあけ、揃って地球とフアックし、
それをはらませようとする。その壮大な光景
は、崇高ですらある。しかし、文明人にとつ
て、狩と遊戯にしかすぎない。ランブイエの
鹿狩、イギリスのキツネ狩り、アルゼンチン
のコンドルの生け捕り……。数多くの野獣が
意味もなく殺され、種族の絶滅にひんしている
動物も多い。これらに対して保護と育成の
考えが実を結びはじめたのは、ごく最近のこ
とである。

■空前のショック/目の前で人間がライオ ンに喰われる！

事件は、一九七五年二月十八日、アフリカ
のアンゴラにある自然動物保護区で起った。
観光客のピット・デーニッツは、写真を撮る
ために車から下り、ライオンにレンズを向け
ている時に背後に隠れていたもう一頭のライ
オンに不意を襲われ、またたく間に数頭のラ
イオンに喰い殺されてしまった。妻と、九才
の娘、二才の息子の目の前で起ったこの二分
間の惨事は、二人の現場にいあわせたツーリ
ストの16ミリカメラに完全に記録された。

■凄惨な野獣狩り・人間狩り

四秒に一挺製造されるライフルと一時間に
百六〇万発作られる弾丸によって、アフリカ
では毎年六千頭の象、百四〇万頭のシマウマ、
百六〇万頭の野牛が殺されている。獲物をと
る生活を文明によって破壊されたエスキモー
人は、意味もなく海鳥を射ち落して憂鬱を忘
れようとする。アンデスの農民たちはピュー
マを殺し、そのピューマに復讐される。

しかし、より残酷な行為は、人間による人
間狩りだ。アマゾンのインディオ、グアルナ
キ族が毒のついた吹矢で白人の入植者を殺す
というので、入植者達は無頼の私設軍隊を使
ってインディオを虐殺している。その数毎年
七五〇〇人。捕えたインディオの性器を切り
とり、頭の皮をはぎ、首を切る男たち。これ
は、戦争ではない。残忍な「狩り」なのだ。
人間の未来にとって、このような「狩り」
は必要なのであるうか。

野性の狼と対話するドイツのE・ツィーメ
ン博士の姿で終るこの作品のラストは、ある
願望と祈りがこめられている。

有楽シネマ

TEL 201 — 3066